

移動とマルチリンガリズム

——OSS文書からみた太平洋戦争期のコリアン・アメリカン

宋 恵媛（大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター）

キーワード：移動／マルチリンガル／通訳／翻訳／太平洋戦争／ディアスポラ／OSS／コリアン・アメリカン／女性翻訳者

はじめに—ある兄弟の再会

1944年末、中国の西安で^{ウォンサン}元山出身のある朝鮮人の兄弟が、偶然の再会を果たした。そのとき兄はアメリカ戦略情報部Office of Strategic Service (OSS) の朝鮮人部隊の一員で、弟は日本軍の兵士だった⁽¹⁾。なぜ朝鮮人の兄弟が中国で、一方は米軍兵士として、他方は日本軍兵士として鉢合わせただろうか。

その3年前の日本軍によるハワイ真珠湾攻撃時、兄の金チェスター・フンChester Hoon, Kim (1900年生)⁽²⁾は、朝鮮人参を日系の農家に売り歩いたりしながら、オレゴン州立大学の博士課程で食品加工学を学んでいた。キリスト教神学を学ぶ留学生として渡米して以来、11年が経っていた。まもなく金は、サンフランシスコ西部防衛司令部の民間部隊にリクルートされ、他の二人の朝鮮人とともにモンタナ州ミ

ズラにある米司法省移民帰化局 (INS) の敵性外国人収容所⁽³⁾ の日本語—英語通訳として雇われた。ここには、連邦捜査局FBIが逮捕した7,000人以上の日本人が収監されていた。金はミズラ収容所で1942年2月から6か月間、訊問の通訳、米国に対する「忠誠度テスト」の回答や、検閲に供するための手紙の英訳作業などに従事した。すべての日系人収容者の訊問が完了し、ミズラ収容所を去って別の収容所等へ散っていくと、今度は米政府が日本の会社から押収した法律、会計文書の翻訳で生計を立てた⁽⁴⁾。1942年6月に設置されたばかりのOSSで働き始めるのは、その後のことである。

OSSは、ドノヴァンCol. William Donovanが率いた米政府の情報機関である。第二次世界大戦中の1941年7月にフランクリン・ローズベルト大統領が創設した、情報調査局the Coordinator of Information (COI) の後身にあたる。第二次世界大戦終結後の1945年9月20日まで存続し、1万3千人がそこで勤務した。その後、1946年に設立されたのが中央情報局 (CIA) である。米国メリーランド州カレッジパークの米国立公文書館NARA所蔵のOSS資料には、金

*本稿での個人名については、先行研究やメディア、書籍などですでに実名が挙がっている人物や公人以外は、イニシャルで表記した。

(1) アン・ヒョンジュ『二つの敵対国の間で—第二次世界大戦中の敵性外国人収容所の朝鮮人通訳たち』、カリフォルニア州立大学、2002年 (Hyung-ju Ahn. *Between Two Adversaries: Korean Interpreters at Japanese Alien Enemy Detention Centers during World War II*. California State University, Fullerton, 2002.)、128頁

(2) 上記のアンは、金チェスター・チェフン Chester Chehoon, Kim と表記している。本人に直接確認した名前であり、こちらの方が正確と思われるが、本稿ではOSS資料の表記に従った。

(3) 桑井輝子「短歌・俳句・川柳が詠むアメリカ抑留所 — JICA 横浜海外移住資料館所蔵短詩型文学資料紹介」(『海外移住資料館研究紀要』第5号、2011年3月) には、ミズラ収容所で1942年1月頃に開かれた日系人による第1回の句会で、優秀作品に選ばれた紅雨という作者の「新年雑詠」という句、「無事なりと検閲済みの初便り」が紹介されている。その検閲を担ったのが、まさにこの3人の朝鮮人であったとみられる。

(4) アン、128頁

チェスター・ファンに関する様々な資料が残されている。1944年6月6日付のOSS作成の雇用申請書⁽⁵⁾によれば、彼は日本政府発行の旅券を所持し⁽⁶⁾、1940年にサンフランシスコで結成された朝鮮人留学生団体、新到会^{シンドフェ}に所属していた。大学図書館のアシスタント、カリフォルニア州デラノでの農場の手伝い、大韓民国会ロサンゼルス支部での*New Korea*誌の共同編集、ボルダーのコロラド大学付設の海軍日本語学校講師を経て⁽⁷⁾、1942年10月からUCLAで日本語講師として働いていた。「軍歴」欄には、INS収容所の通訳の経験も記されている⁽⁸⁾。

仕事関係のレファランスとして挙げている人物には、崔ボンユン Bong Yoon Choy（カリフォルニア大学の日本語講師）、崔ヨンスン Young Soon Choy（コロラド大学の海軍日本語学校講師）、李テムク Tai Mook, Lee（米戦争情報局の翻訳者）の名が見られる⁽⁹⁾。言語能力を記す欄には、ABCの三段階評価で朝鮮語、日本語がAAA（読み・書き・会話の順）、中国語はAABと自己評価されている⁽¹⁰⁾。

この雇用申請書は、その後、金チェスター・ファンが弟と邂逅することになる、中国で進

められていたNAPKO（Naval Penetration of Korea）作戦への参加に際して提出されたものとみられる。米国在住の朝鮮人や、日本兵として連合国軍に捕えられた朝鮮人兵士を使い、潜水艦や落下傘で朝鮮半島へ入り込み、諜報網を構築するというOSS主導の作戦である。一方、弟の方は日本軍を脱走し、重慶の大韓民国臨時政府軍である光復軍へ合流するところだった。西安では、朝鮮や中国から朝鮮人の革命、蜂起を扇動するという米国の対日戦の一環として、OSSと光復軍の連合によるイーグル作戦や、ノースチャイナ（華北）作戦、そしてNAPKO作戦等が準備中だった。

つまりこの朝鮮人の兄弟は、太平洋戦争末期にOSSが展開した北東アジア戦略に引き寄せられ、まったく異なる経路と経験を経て、それぞれ西安に到達したのだった。

＊

真珠湾攻撃以後、米国政府と軍は日本語通訳、翻訳、文書分析者として、在米朝鮮人を本格的にリクルートし始めた。OSS資料からは、朝鮮人の二大集住地域であるハワイとロサンゼルスにOSS職員が直接赴き、現地で情報収集と

-
- (5) RG226, entry A1 224, Personnel Files of the Office of Strategic Services 1942-1962, Box 124. NARA 所蔵（以下、断りが無い限り英文資料はすべて NARA 所蔵）
- (6) 米国在住の朝鮮人留学生の旅券は、55 人の大韓帝国政府発行旅券（1903 年－1905 年）、上海を経由した 541 人の中国旅券（1910 年－1918 年）、289 人の日本旅券（1920 年－1940 年）の三種だった。鄭秉峻『玄アリスとその時代：歴史にのまれていった悲劇の境界人』（トルベグ、2015 年）参照
- (7) 金チェスター・ファンは、のちに日本文学研究者として活躍することになるドナルド・キーンや、エドワード・サイデンステッカーを同校で教えた可能性もある。ただし、ドナルド・キーンは、*Chronicles of My Life: An American in the Heart of Japan*（日本語題は『ドナルド・キーン自伝』）等の著作で、米海軍の日本語学校についてしばしば言及しているが、管見の限り、朝鮮人講師についての直接的な言及は見られない。メリーランド大学歴史学部のマーリン・メイヨーが 1982 年にコロンビア大学でキーンに対して行ったインタビューでも同様である。同インタビューでは、戦地での捕虜訪問で出会った朝鮮人を「無知な労働者」として、日本の知識人捕虜に向けるのとは全く異なる、見下した視線を持っていた様子がうかがえる。“Oral History Project on Allied Occupation of Japan” (Subject: Donald Keene, By: Marlene Mayo, May 14, 1982). https://prangecollection.files.wordpress.com/2017/06/keenedonald_with-errata.pdf 38 頁参照。
- (8) 実は、この雇用申請書には、ビスマルクのフォート・リンカーンにある INS 収容所で通訳をしていた事実のみが記されている。だが、アンによる本人へのインタビューによると、金チェスター・ファンはミゾラで主に業務を行っており、フォート・リンカーンへは一時期に手伝いに行っただけという。アン前掲書には、金がミゾラ収容所で他の二人の通訳とともに写っている写真も掲載されている。
- (9) この二人の崔は真珠湾攻撃直後に FBI に雇われ、攻撃との関与が疑われた黒龍会メンバーの訊問通訳に関わった。アン、39 頁参照。
- (10) 「外国語能力」の欄は、文書によって読み・書き・会話の順番が異なっている。本稿では混乱を避けるため、すべて読み・書き・会話の順番で統一する。レベルの表記法などもばらばらだが、全て ABC で記した。

募集を行う方法⁽¹¹⁾や、大韓民国臨時政府欧米委員会（委員長李承晩）、大韓国民会や新到会など、米国内の朝鮮人組織を当てる方法が採られたことがわかる。とくに朝鮮人留学生組織である新到会（1940年の時点で会員数80名）は、人材の豊富な供給元となった。1930年代以降の留学生たちは、すでに朝鮮に張り巡らされていた日本の教育システムで学んでいたため、ほぼ全員が三か国語以上の話者だったからだ。COIは1942年4月、50人の朝鮮人学生に十分な日本語能力があると判断し、うち14人を司法省と米陸軍省で雇った⁽¹²⁾。

当時、朝鮮人の日本語話者は米国にとって貴重な人材だった。一例を挙げよう。1942年5月、ニューヨークのシラキュース大学の学部長が、H.T. Kimという学生を通訳、翻訳者として推薦するため、ワシントンD.C.の人事計画委員会に書簡を送った⁽¹³⁾。ここには、「日本人以外で日本語が話せるのは米国に40名ほどしかない」と記されている⁽¹⁴⁾。同じ書簡で、朝鮮人が日本人を嫌っていることにも言及されているように、当時の朝鮮人たちの日本への憎悪も米国にとっては好都合なものだった。この時期の在米朝鮮人は、故国が日本の植民地支配下に置かれ、米留学の際にも厳しい制限と監視が課され、さらには日米開戦によって帰路まで断たれた、という出口なしの状態にあったのだ。

朝鮮人通訳・翻訳者たちの勤務先は、OSS（本部：ワシントンD.C.）のほか、日系人の収容と訊問を担当した司法省移民帰化局、陸軍情報部、海軍、戦争検閲局、サンフランシスコ戦争情報局（OWI、日本語と朝鮮語で親米的内容の短波放送を行った）、連邦捜査局（FBI）などだった。その中には、1942年にCOIに入隊し、OSS、戦後の米24軍情報参謀部（G-2）、971CIC派遣隊での活動を経て、韓国内務部長官などを歴任した張錫潤⁽¹⁵⁾や、同じく1942年にOSSに入隊し、後に国連韓国代表や通信部長官を歴任した張基永のように、韓国の李承晩政権の中核で活躍した人々もいる。これらの朝鮮人たちは、ワシントンD.C.、シカゴ、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ニューヨークなど米国主要都市のほか、ガダルカナル、ミャンマー、インドなどの戦地、中国、そして戦後の南朝鮮／韓国でも勤務している。マルチリンガルの朝鮮人たちは、必然的に移動者という側面も帯びていたのだった。

1. 本稿の目的と先行研究の検討

本稿の目的は、1941年のアジア太平洋戦争の勃発から終結までの4年弱の間に、在米朝鮮人たちの複数言語運用能力が米政府・軍にどう利用されたかを検討することである。それにあたり、1800年代後半から1930年代までに渡米した

(11) 1943年4月6日付のOSSのW.M. Drummondによるメモランダム“Meeting with Hawaiian Koreans at McCone's.”によると、OSS研究分析課R&Aのマッキューン MacCune とステルズ Stells が、李承晩の反対勢力の代表者である“ミスター金”ら数人の朝鮮人と会合を持ち、どう米国の戦争に協力するかを話し合っている。また、1944年にはOSSのWalkerがロサンゼルス在住の朝鮮人をリクルート中という文書も確認できる。RG226, entry UD92, COI/OSS Central Files 194101946, Container 269, Folder18, RG226, entry A1 224, Personnel Files of the Office of Strategic Services 1942-1962, Box124,13437.

(12) “Potentialities of Korean Help Against Japan”, Report No. 41a, April 25, 1942, OSS Microfilm D6, Part1, reel 16, アン前掲書、61頁より再引用

(13) “From: Syracuse University, Maxwell Graduate School of Citizenship and Public Affairs, To: National Roster of Scientific and Specialized Personnel, National Resources Planning Board, Washington, D.C.” RG226, entry UD92, OSS E 92, Box108, 9742.

(14) ただし1942年4月付の文書によれば、現在OSSに適当なポストがないとしてその申請は退けられている。後年、H.T. Kimは韓国の大学の総長となった。

(15) 張錫潤（1904年 - 2004年）は上海経由で渡米した中国籍者で、李承晩と近い関係にあった。きわめて高い日本語と朝鮮語能力を持ち、米陸軍情報部 MIS で空軍技能軍曹としてデリーとコルカタ戦線に赴いた際は、ミャンマー語とヒンディー語も習得した。後に功労勲章 Legion of Merit を受勲。中国のOSS支部設立準備にも関わった。RG226, entry A1 224, Personnel Files of the Office of Strategic Services 1942-1962, Box 117.

朝鮮人と、その二世たちの言語能力の調査、分析を行った。この作業を通して、朝鮮人の複数言語使用と移動という角度から、第二次世界大戦期から冷戦期へ至るまでの朝鮮、米国、日本、中国の地政学を描き直してみたい。

この時期に、語学能力を買われて米国政府や軍に雇用された朝鮮人の全貌は、まだ明らかになっていない。まず、米政府・軍の膨大な資料の中から、関連文書を探し出すことが容易ではない。なぜなら、当時の朝鮮人通訳たちの資料がどこかにまとまってあるわけではないからである。各地に散らばって活動した朝鮮系の通訳、翻訳者の数は、総勢100名にも満たないと推測される。そのため、約6000人の日系二世語学兵たちのように、後日、退役軍人会などが結成されることもなかった。また、日系退役軍人たちの会誌や文集などにも、朝鮮人の名はほぼ出てこない。そもそも、語学兵についての機密解除が1973年だったように、その存在が戦後30年近くも公にされなかったことも、実態解明の妨げとなった。米国が広大で高等教育機関も多く、米国内の朝鮮人同胞の動向を把握していた公的な団体がなかったこと、翻訳・通訳者たちの間に左右イデオロギー対立が存在しており、一枚岩でなかったこともその原因として挙げられるだろう。

上記のような事情を反映して、本稿に直接関連する先行研究も多くはない。その中にあって、INS管轄の収容所に勤務した元通訳を探し出し、1990年代に韓国と米国でインタビュー調査とその分析を行ったアン・ヒョンジュ『二つの敵対国の間で―第二次世界大戦中の敵性外国人収容所の朝鮮人通訳たち』（カリフォルニア州立大学、2002年）は、先駆的な研究である。同書は、4人の朝鮮人元通訳の聞き取り調査内容を紹介し、計7人の朝鮮人通訳の存在を明ら

かにしたものである。同時に、金チェスター・フンも巻き込まれた、日本人収容者殴打事件の考察を通して、当時の朝鮮人が、日本のみならず、米国の差別構造にも組み込まれていたことを検証した。また、韓国で出版された鄭秉峻^{チョンビョンジュン}『玄アリスとその時代：歴史にのまれていった悲劇の境界人』も重要である。朝鮮の近現代史を象徴するような、ハワイ生まれの四か国語話者の社会運動家、玄アリスの生涯を丹念に追った労作である。玄アリスは、太平洋戦争期には中国語－英語、日本の連合国総司令部SCAP／GHQ（以下GHQ）では日本語－英語、在朝鮮米陸軍司令部軍政庁（以下、南朝鮮米軍政庁）での郵便検閲では朝鮮語－日本語－英語の翻訳に携わった女性である。

OSSと朝鮮というテーマに関する研究としては、コリアン・アメリカンの方善柱^{バンソンジュ}が、1990年代前半にNAPKO作戦に関連する資料の発掘と分析を行っている。方善柱による収集資料を編んだ韓国の国家報勲処編『OSSのNAPKO作戦：在米韓人たちの祖国挺進計画（NAPKO Project Of OSS : 재미한인들의 조국 정진 계획）』（海外 韓国獨立運動史料XXIV, 米州編、2001年）』（解題：鄭秉峻）には、野戦浸透訓練部隊Field Experiment Unit (FEU) に所属した19人の人物のファイルが収められている。同時期の別の作戦である、米空軍と臨時政府の光復軍が合同で取り組んだイーグル作戦については、ロバートS.キム『プロジェクト・イーグル：第二次世界大戦中の北朝鮮のアメリカ人クリスチャン（Robert S. Kim, *Project Eagle: The American Christians of North Korea in World War II*）』（Potomac Books Inc, 2017年）に詳しい。

その他の関連研究には、朝鮮人の米国移民史や朝鮮人コミュニティ⁽¹⁶⁾、ハワイへ渡った写

(16) Warren Y. Kim. 在米韓人 50 年史. Reedley, 1959., Patterson, Wayne. *The Ilse: First Generation Korean Immigrants in Hawaii 1903-1973*. Honolulu: University of Hawaii Press, 2000., Michael E. Macmillan. "Unwanted Allies: Koreans as Enemy Aliens in World War II." *The Hawaiian Journal of History*. vol. 19, 1985., 李里花『「国がない」ディアスポラの歴史：戦前のハワイにおけるコリア系移民のナショナリズムとアイデンティティ』かんよう出版、2015 年、Marn J. Cha. *Koreans in Central California (1903-1957) : A Study of Settlement and Transnational Politics*, UPA, 2010., Cindy I-Fen Cheng. *Citizens of Asian America: Democracy and Race during the Cold War*. NYU Press, 2013. 等

真花嫁⁽¹⁷⁾、米国留学⁽¹⁸⁾、日系米国人二世語学兵⁽¹⁹⁾などについての論考がある。

本稿で使用した資料は、NARA所蔵のRG 226, Office of Strategic Services, “Personnel Files of the Office of Strategic Services 1942-1962”、および“COI/OSS Central Files 1941-1946”である。NARAが作成したOSS関係者名簿を参照し、数千人分のファイルの中から朝鮮人とみられる人物を抽出した。上記二種の資料に重複して収録されている人物もいれば、一方にのみある場合もある。今回、朝鮮人と識別できた人物の数は約50人だが、実際にはもっと多いとみられる。日本の創氏改名の強制力は米国にまでは及ばなかったため、朝鮮名と日本名との混同という問題はないが、代わりに李Leeや崔Choi / Choy、秦／陳Chinなど、朝鮮名と中国名の区別が難しい場合がある。その場合は、市民権Citizenship、人種あるいは国籍Racial or National Origin、出生地を書く欄から、朝鮮系であることを一つずつ確認した。興味深いことに、朝鮮人が国籍や市民権欄に「Japan」と記載している例はなかった。しかしながら、朝鮮名の英語表記法が当時は定まっておらず、Penn, Ben, Newなど、一見すると英語名にも見える表記も多いことから、全員を網羅できていない可能性は充分にある。OSSに関わった人物すべてのファイルがここに収録されていると断定できないことも、この方法の限界として認めざるを得ない。

OSS資料の朝鮮人関連ファイルの作成年は、1944年から1945年にかけてが最も多い。中国における複数の特殊作戦の要員集めが、OSSにとって最大の朝鮮関連業務であったためだ。これらの作戦には、高度な複数言語能力（朝鮮語、英語、日本語、中国語）が要求されたため、実際の採用如何にかかわらず、言語能力に秀でた人々のファイルが集まっている。

OSS資料は、人物情報やリクルートに関するOSS内のメモランダム、米軍からOSS宛ての人材調達要請書、採用候補者の調査報告、連邦政府雇用申請書、OSSが実施した面談の結果報告、朝鮮人および朝鮮系米国籍者専用の履歴書、帰化申請書類、異動通知、給料関連文書など、多岐にわたる。

その中でもっとも詳細に人物像が把握できるのは、「連邦政府雇用申請書」である。この申請書には、43もの項目にわたって詳細に情報を記入する欄がある。ざっと項目を挙げると、名前、現住所、生年月日、年齢、申請日、選挙権のある州、電話番号、性別、未婚か既婚か、身長と体重、身体的特徴、人種、出生地と出生国、米国市民権の有無、犯罪歴、障害の有無、反政府活動の有無、罰金歴、過去12か月の飲酒歴、現在連邦政府で働いているか、軍歴、米国の義務兵役登録の有無、陸軍か海軍の予備役のメンバーか、夫婦以外の扶養者、雇用地の希望（米国内か国外か）、希望最低給料、希望する出張頻度、連邦政府職員申請歴、過去5年の職員採用歴、教育（初等教育から博士までの12段階の学歴、学部と大学院での専攻）、英語以外の言語の知識、仕事関係と居住地近辺のレファランス（各5人）、職歴、年金、妻や夫の雇用者名と住所、妻、夫、父、母が米国外で生まれたか、血縁、姻戚に外国居住者がいるか、技能、希望する職種／特技といった具合である。重要人物の場合、手書き申請書とタイプライターで打ち直されたものの、二つのバージョンがある場合もある。一方、給与支払い記録しかない場合も多々ある。本稿では、この連邦政府雇用申請書の中の「教育歴」と「外国語の知識」に特に着目した。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、米国当局が在米朝鮮人の言語能力に注目していく過程と、李承晩がOSSへの人材供給に果たし

(17) 河上幸子『在米コリアンのサンフランシスコ日本街：境界領域の人類学』お茶の水書房、2014年

(18) 鄭秉峻「日帝下韓国女性の米国留学と近代経験（일제하 한국여성의 미국유학과 근대경험）」（『梨花史学研究』39巻、2009年）等

(19) J. マクノートン『二世リンギスト』米陸軍省、2007年（James C. McNaughton. *Nisei Linguists: Japanese Americans in the Military Intelligence Service During World War II*. Department of the Army: Washington, D.C., 2007.）

た役割について論じる。第3節で真珠湾攻撃後の在米朝鮮人二世たちの動向と、米当局による彼／彼女らの言語能力の活用についてみた後、第4節では三か国語話者としての留学生たちの言語状況を追う。続く第5節では、対日情報戦のための語学兵育成と供給を行った、米陸軍語学学校の中の朝鮮人に焦点を当てる。第6節では、NAPKO作戦に加わった米国在住朝鮮人たちに着目する。最後の第7節では、これまでほとんど知られてこなかった女性の通訳、翻訳者たちについて明らかにしたい。

OSSの存続期間は、1942年6月13日から1945年9月20日までの3年弱である。この間に、太平洋戦争、日本敗戦、朝鮮の植民地解放、日本のSCAP/GHQと南朝鮮の米軍政庁設立という出来事が立て続けに起きている。米国の影響下で国家の解体、再建、分裂が起きた、朝鮮と日本における激変期といえる。この期間の朝鮮人の移動と多言語状況に光を当てることで、戦前／戦後、植民地期／解放後といった1945年に境界線を引く区分法から脱却し、日本、朝鮮、米国における1940年代から1950年代にかけての歴史をとらえ直す端緒としたい。

2. 米国の対日戦争準備と李承晩の思惑

OSSの創設は1942年6月のことだが、それ以前から米国政府と軍は将来の日本との戦争に備え、米国在住朝鮮人の利用可能性を探っていた。例えば、米陸軍は早くも1920年と1921年に、上海の大韓民国臨時政府大統領だった李承

晩（1875年生、1904年に米国留学）が主導する大韓人国民会の協力の下、米国内の朝鮮人留学生の日本語能力に関するレポートを作成している⁽²⁰⁾。また、1941年の夏には、李承晩の強力な後援者となる米陸軍情報参謀部（G-2）のグッドフェロー Preston Millard Goodfellowとの繋がりも持っていた⁽²¹⁾。李承晩は、OSSの前身であるCOIが1941年9月から12月まで開催した部間会議にも参加し、COIとの結びつきも強めていった⁽²²⁾。

太平洋戦争開戦時、李承晩は重慶の大韓民国臨時政府欧米委員部委員長の地位にあった。ワシントンD.C.を拠点にした李承晩は、OSSと臨時政府の連結に影響力を発揮していく。臨時政府欧米委員部のスタッガーズJ.W. Staggersは、1942年10月のOSS宛て書簡で、OSSからリクエストのあった朝鮮人の人材32人に、さらに4人を加えた36人分の履歴書を送ると書き記している⁽²³⁾。その後1943年初め、OSSは情報部員として育成するため朝鮮系二世たち8人をリクルートした⁽²⁴⁾。同年6月9日、OSS次長となっていたグッドフェローは、米陸軍情報部語学学校the Military Intelligence Service Language School（MISLS）への朝鮮人入学志願者の名簿を陸軍省に提出し⁽²⁵⁾、その二日後に李承晩は同校に宛てて、これまで自分がOSSに朝鮮人60人を推薦し、そのうち12人がワシントンD.C.で訓練中であると書き送っている⁽²⁶⁾。

実際、OSSの人事ファイルを見ると、李承晩が推薦人やレファランスになっている場合が多い。それらの人々の生年は、1883年から1921年

(20) アン、13 頁

(21) 鄭秉峻「解題」『OSS の NAPKO 作戦：在米韓人たちの祖国挺進計画』、2 頁

(22) 同上

(23) RG226, entry UD92, OSS E 92 Box217, Folder36. なお、1943 年 9 月から 1945 年 7 月にかけて、光復軍の朝鮮人兵士が、捕虜訪問通訳や日本軍のラジオ傍受など、日本語能力を要する任務を帯びてビルマ戦線に赴いてる。これは英連邦国軍の要請によるものだった。

(24) [Donovan] to [Col. Charles Y. Banfill], April 23, 1943 and [Banfill] to [Donovan], April 28, 1943, NARA RG226, microform M1642, roll79, frames 122-24. ロバート S. キム前掲書、99 頁より再引用

(25) [Preston M. Goodfellow, Deputy Director, OSS] to [Mafor W. D. Edwards, WD], 1943.6.9. 『OSS の NAPKO プロジェクト』、80 頁所収。この名簿には、朴基蘭 Ki Pyok (Buck) Pak、林炳稷、李泰模 Tai Mo Lee、邊日曙 S Earl S. Ben、崔正益、張基永、咸龍俊らの名前がみられる。

(26) “Americans of Chinese Ancestry and Americans of Korean Ancestry”, *MISLS Training History*, MISLS, 1944.

までと約40年もの幅があり、1900年以前に生まれた最も古い人々と、1920年前後生まれの最も若い人々の二つのグループに大別できる。1900年以前生まれの人々は大韓人国民会、大韓人同志会（李承晩が中心となった独立運動団体。1924年にハワイで設立）、臨時政府欧米委員部の関係者たちで、若者たちは次節で述べる二世である。

1900年代以前生まれの人々の中には、サンフランシスコの大韓人国民会所属のJ.D.W. Kim（1887年生）⁽²⁷⁾のように、1919年の三一運動後、日本の追及から逃れるために上海へ亡命、同年9月に南京に移動し南京大学に入学、その後1923年に渡米して大学に6か月通ったという人物もいる。語学能力は朝鮮語がAAA、中国語がAAB、日本語がGood（AとBの間）・Good・Good、英語はBBGoodである。同年生まれのW.W. Kim⁽²⁸⁾は、1907年に渡米し、1918年にUCLAで学士号を取得した男性である。朝鮮語、英語能力についての記述はなく、日本語、中国語がともにBBBである。一方、ピョンヤンの学校でキリスト教を学んだY. Kang（1888年生）は、日本語は全くできない。

以上の人々よりも10歳ほど若い、ニューヨーク在住のKim, T.C.（1897年生）は、ピョンヤンの崇実専門学校を経て、米デューク大学を卒業している。日本語能力はBBB、朝鮮語はAAA、英語はBBB、中国語はBBCである。また、大韓人同志会の会員、Yim, J.S.（1899年生）は、朝鮮語、日本語ともに全てAで、中国で教師の経験もある。Y.C. Choi（1901年生）は、1942年秋に李承晩の推薦を受けたソウル出身の役者で、朝鮮語は問題ないが、日本語は全くできない。

以上からは、朝鮮語能力、中国語能力や中国での居住経験が軽視されていたわけではないことがわかる。当時、蒋介石と連携した抗日戦の可能性を探っていた米国が、朝鮮人の中国語／漢文能力も有用なものとみなしていたらしきことがうかがえる⁽²⁹⁾。

他に李承晩と近い人物としては、ワシントンD.C.の臨時政府欧米委員部で李承晩の秘書を何年も務めた、張基永Kee Young Chang（1907生）や、李承晩がOSSに直接推薦した全ウィリアムWilliam B. Chun（1907年生）等がいる。この二人は、後述するように日本語の語学兵としての訓練を受けるため、MISLSに送られた。

3. 真珠湾攻撃の衝撃と朝鮮系二世たち

OSS創設年の1942年には、ハワイやカリフォルニア生まれの朝鮮系二世たちの履歴書が多く提出されている。J. Kwan（1916年生）、K.W.M. Yoon（1917年生）、Kim, S.（1921年生）など、1910年代後半から1920年前後生まれの当時20歳代の男性である。最終学歴は地元の高校やカレッジ卒業が多い。一世の留学生と比べると年齢はやや若く、学歴は相対的に低いといえる。同年代の朝鮮半島や日本在住の朝鮮人とは異なり、日本語ができる者はほほいさない。また、何人かの例外を除けば朝鮮語能力も総じて低かった。米国内での朝鮮語継承の困難を示唆するものだが、そこには労働移民という社会階層的な条件や、米国での朝鮮人の地位の低さといった問題とも絡んでいたことだろう⁽³⁰⁾。

これら二世たちの履歴書の「軍歴」欄には、1942年前半のカリフォルニア朝鮮人予備隊California Korean Reservesともれなく書き

(27) RG226, entry UD92, OSS E 92 Box179, 13432.

(28) RG226, entry UD92, COI/OSS Central Files 1941-1946, Container 218, Folder 2.

(29) 早くも1942年2月に、当時COI長官だったドンヴァンは、ゲールDr. Esson Galeを重慶に派遣し、大韓民国臨時政府との接触を図っている。また同月には、COI幹部が李承晩と面談している。

(30) 日系や中国系の語学学校が1920年代から1930年代にかけて増加したのに対し、朝鮮系のそれは微増に留まったことについて、李里花はそれが家庭の困窮に加え、経済的上昇のために米国の公立学校の教育を優先する傾向が、朝鮮人家庭に強くあったことを指摘している。なお朝鮮語学校では、最初に漢文を習っただけで、やめてしまったケースもあるという（李里花、102頁）。ここからは、日本語教育が伝統的な漢文教育を駆逐していった、同時期の日本や朝鮮半島居住の朝鮮人との教育内容の違いもうかがえる。

込まれている。これは、真珠湾攻撃の3週間後に訓練を開始した、18歳から64歳までの朝鮮、中国、フィリピン人志願者で構成されたカリフォルニア州兵大隊California National Guard Battalionを指すとみられる。その背後には、1941年4月に“朝鮮の勝利を米国とともにKorea for Victory with U.S.”というスローガンを掲げ、従来の朝鮮系諸団体の分裂を克服して結成された在美韓族連合委員会(UKC)があった。このUKCのロサンゼルス支部では、新たな国家防衛隊を組織し、太平洋戦争地域での監視役、通訳として従事できる朝鮮人のリストを作成している⁽³¹⁾。一方で、1924年の米国議会の決定により米国定住の可能性を絶たれていた朝鮮生まれの留学生たちは、日本当局の監視の目をつねに恐れねばならず、朝鮮独立運動にも消極的だった。そのような留学生たちに、二世たちの朝鮮独立運動への熱意は衝撃を与えたという⁽³²⁾。

OSSは、例外的に高い朝鮮語能力を持つ、朝鮮系二世のエリートたちのリクルートも行った。カリフォルニア出身で、調理師の父を持つJ. Chun (1921年生)は、真珠湾直後から6か月間、軍曹としてカリフォルニア朝鮮人部隊に勤務した、ハーバード大学の学生だった。OSSは、1942年8月に彼のリクルートを試みている。その時点での言語能力は、朝鮮語AAA、ドイツ語BBCだった。OSSは、彼に日本語を習得させようとした。1944年に日本語の訓練を施し、米陸軍兵として極東での朝鮮語通訳、翻訳の即戦力として使おうとしたが⁽³³⁾、日本語能力は1944年の時点ですべてCだった。一方、ロサンゼルス出身のKim, C (1921年生)も、朝鮮語能力が全てAの二世である。OSSがどのように彼を活用したのかは不明だが、その履歴書には、3歳下の弟カルバンCalvinの名が記されている。これは、1945年にMISLSの朝鮮語講師となる、カルバン・キムである可能性も考えられる。

4. 三言語話者としての留学生たち

OSS資料にファイルのある米国留学生、つまり当局が利用価値を認めた人材の多くの生年は、1905年から1915年の間に集中している。日本の教育システムが朝鮮半島にくまなく浸透し、日本への留学生が増加した時期に青年期を迎えた人々である。大日本帝国の旅券で1920年から1940年の間に渡米した留学生たちは、その15パーセントが博士、65パーセントが学士取得という高学歴集団だった⁽³⁴⁾。これらの人々は、太平洋戦争勃発により米国滞留を余儀なくされたが、それが米政府に積極的に協力する道を選ぶ要因の一つになったとみられる。

冒頭の金チェスター・フンもそうであるように、当時の留学生たちの多くは朝鮮でプロテスタント系の大学か神学校(ピョンヤンの崇実専門学校、あるいはソウルの朝鮮基督教学校(延世大学の前身))に通った経験があり、米国留学時の学部の専攻も神学が多い。米国留学自体、米国内のプロテスタント教会からのスポンサーシップなしには実現困難で、かつ当時の日本政府も神学以外の専攻を選ぶことを認めなかったためである。日本への反感は、植民地支配が近因、遠因となって朝鮮の外へ出ていった留学生たちが、自然に持っていた感情だったといえる。1939年のキリスト教徒たちの神社参拝拒否運動へと至る、朝鮮における日本当局のキリスト教弾圧は、クリスチャンの多い在米朝鮮人たちの反日感情を増幅させたことだろう。

OSSは、このような在米朝鮮人たちのキリスト教信仰を、対日戦において役立つものにとらえていた。例えば、1942年にOSSがリクルートしたJ. S. Kim (1909年生)という男性がいる。ピョンヤンの長老派の牧師を父に持ち、本人も崇実専門学校等を経て、米プリンストン大学で神学を修めた人物である。OSSは日本語、中国

(31) アン、8頁

(32) 同上、11頁-13頁

(33) RG226, entry UD92, COI/OSS Central Files 1941-1946, Container 218, Folder1.

(34) アン、10頁

語、朝鮮語、英語に熟達していたKimに多大な関心を寄せたが、それと同時に、クリスチャンである彼とその家族の反日感情にも大いに着目していた⁽³⁵⁾。Kimは、OSSには協力したいが、(日本人の：筆者注)殺人や殺人につながるような情報収集への関与は絶対に行わないと主張したことも、OSSから一目置かれていたようである。

また、コリアン・アメリカン文学の先駆者、ヨンヒル・カンYounghill Kang (1903年生)に関する分厚いファイルも、OSS文書には含まれている。朝鮮の存在を英語圏の人々に初めて知らせた自伝的小説『草ぶきの屋根 *Grass Roof*』(1931年)、渡米したばかりの朝鮮人留学生の経験を描いた同じく自伝的小説『イースト・ゴーズ・ウェスト *East Goes West*』(1937年)を代表作とする作家である。日本、中国、シベリアでの居住経験があり、1919年の三一独立運動の際に朝鮮で日本当局に逮捕された。1921年に留学生としてカナダへ渡り、その後米国に入国した。小説の成功により、グッゲンハイム奨学金を得て2年のヨーロッパ留学も経験している。自己評価によれば、日本語、中国語、朝鮮語はすべてA、ドイツ語はBAC、イタリア語とフランス語はBBC、ギリシャ語はCCC、スペイン語はCBCである⁽³⁶⁾。手書きの申請書や調書を見ると、そのところどころに、日本に対する嫌悪感が垣間見られるのが目を引く⁽³⁷⁾。

カンは1942年に、ミゾラ収容所で金チェスター・フンの同僚だった黄ソンスとともにニューヨークの米陸軍情報部で働き、1943年に経済戦委員会朝鮮・マンチュリア部門の首席経済アナ

リストとして、1944年にはニューヨーク陸軍情報部の教育部門の言語コンサルタントとして働いた。また、民間人の身分で各地の米陸軍基地等での講義も行った。

OSSは1943年6月、ヨンヒル・カンの日本についての知識、および日本語と「オリエント(東洋)語」[朝鮮語と中国語／漢文を指す]の能力を高く評価し、リクルートしようとしたが、この時はOSS内部で却下された⁽³⁸⁾。なお第二次世界大戦後、ヨンヒル・カンは南朝鮮米軍政庁でアドバイザーとして短期間、勤務している。

5. 米陸軍語学学校 MISLS： 日本語から朝鮮語へ

真珠湾攻撃直前の1941年11月、カリフォルニア州プレシディオのクリッシーフィールドで米4軍情報学校the Fourth Army Intelligence Schoolが開校された。対日情報戦を目的とした語学兵養成機関である。その後、1942年5月にミネソタ州のキャンプ・サヴェッジへ移転する際に、米陸軍語学学校MISLSと改称された。1946年の閉校までに、圧倒的多数だった日系アメリカ人約6千人と、コケージャン、朝鮮系、中国系の人々ら約780人が厳しい訓練を受け、そのうち3700人が各戦地に送られた。

MISLSはアジア太平洋戦線の拡大に伴うさらなる語学要員確保のため、1943年1月の中国系学生に続き、春には朝鮮人留学生や二世たちに日本語を学ばせる計画を立てた。OSSはそのリクルートのため、UCバークレー校の東洋

(35) 1942年8月4日付のW.J. Horriganの報告。RG226, entry UD92, OSS E 92 Box206, Folder31.

(36) ただし、その日本語や中国語能力について、カンは東洋ではきちんとした教育を受けていないとして、威龍俊 R. C. Hahm から疑問が呈されている。“Memorandum on Younghill Kang”, RG0226 Office of Strategic Services, entry UD 92, COI/OSS Central Files 1941-1946, Box 309, Folder 10. 1944.12.1. 威龍俊は、1945年1月にOSSの朝鮮グループ指揮官に就任。1月に米国民権を得て、3月に米海軍の大尉となった人物。

(37) 例えば父親の死因を記入する欄に、ヨンヒル・カンは「JAP」と記している。別の調書では「病死」とあるので、これは直接的な日本人の暴行が死因というわけではなく、父親の日本に対する憎悪の感情を表現したものだろう。

(38) RG226, Office of Strategic Services, entry UD 92, COI/OSS Central Files 1941-1946, Box 309, Folder10. なお、1942年にもヨンヒル・カンを日本語通訳としてCOIで雇用するのに反対する意見が出されている。[S. Cho] to [Colonel Pettigrew] (1942.1.13)、『OSSのNAPKOプロジェクト』21頁所収

言語学部、コリアン・アメリカン文化協会（ホノルル）、新到会（シカゴ、プリンストン）、そして李承晩に接触している⁽³⁹⁾。同年8月7日、MISLSのルソー中尉Paul F. Rusohは、現時点で朝鮮人将校2人と朝鮮人下士官10人が日本語コースを受講中で、さらに16人がやって来る予定だと李承晩に伝えている⁽⁴⁰⁾。

OSS資料によれば、1943年6月後半に日本語の語学兵としての訓練を受けるため一等兵としてMISLSへ送られたのは、以下の朝鮮人たちである。張基永Kee Young Chang, 全ウィリアムWilliam B. Chun, P S. Hyun, H C. Joe, H. Lee, S M. Marr, T. Wooh, 李淳鎔Allen Carl Wylie⁽⁴¹⁾。ここには、留学生と二世が混在している。李承晩の秘書だった張基永は、ソウルの高等学校を経て、1921年から3年間日本の中央大学に通い学士号を取得し、1930年以後、米国インディアナポリスのバトラー大学、インディアナ大学大学院に通った人物である。語学能力は朝鮮語、日本語、中国語、英語すべてAという秀才だ。MISLS入学直後にワシントンD.C.に戻ることを希望したが、却下されて留まった⁽⁴²⁾。また、全ウィリアム（1907年生）の言語能力は、英語が全てA、朝鮮語が全てB、日本語が全てC、スペイン語とドイツ語がBBCであった。彼もMISLSに不満を持って去りたがった。彼の場合はその願いが聞き入れられ、一か月もせずにMISLSを出てからは、恵まれた体格を生かして米陸軍の兵士として活躍した。なお、このときMISLSに送られた朝鮮人の多くは、1945年に中国や沖縄へと移動することになる。

MISLSで日本人扱いをされ、日本人講師や学生とともに日本語を学ぶことに嫌悪感を示した張基永や全ウィリアムらから直接苦情を聞いたのか、李承晩はMISLSに対して激しい抗議を行っている⁽⁴³⁾。MISLS内の朝鮮人と日本人間の不和を認識していたルソー中尉は、「白人も含めたすべての学生が日系二世の講師に教わるになっているが、朝鮮人学生を指揮するのは朝鮮人か白人将校だ」と、李承晩宛の書簡で説明している。

実は、MISLSで日本語語学兵の訓練を受けた朝鮮人学生全体の能力はさほど高くなかった。早くも1943年12月には、朝、日、英の三言語習得がいかに困難かが、MISLS内部文書で報告された⁽⁴⁴⁾。優秀な人材を得られない理由として、朝鮮人学生数が日系学生のそれと比べて圧倒的に少ないことが挙げられている。

MISLSが1944年にミネソタ州のフォート・スネリングへ再移転した際には、中国語と朝鮮語のクラスが追加で開講された。太平洋戦争末期の米政府と軍の東アジア政策の変化が、ここからは見て取れる。朝鮮語クラスの最初の受講者は、ハワイ生まれの朝鮮系二世たち24名だった。全員英語ネイティブで、米市民権を持っていた。しかし、講師のカルバン・キムを例外として、受講者たちの朝鮮語能力はあまり高くなく、米当局は人材確保と育成に苦慮した⁽⁴⁵⁾。

一方OSSでは1945年、NAPKO作戦の一環として、上記のMISLSとは別個に、ペンシルベニア大学にOSS独自の6か月の朝鮮語と日本語のコースを開設した⁽⁴⁶⁾。だが、1945年8月15日

(39) "Americans of Chinese Ancestry and Americans of Korean Ancestry", *MISLS Training History*, 1944.

(40) Ibid

(41) Memorandum [Major Carl O. Hoffman] to [J.A. Michell, Jr] (1944.7.20), RG226, entry A1 224, Personnel Files of the Office of Strategic Services 1942-1962, Box 124, 13437.

(42) RG226, entry A1 224, Personnel Files of the Office of Strategic Services 1942-1962, Box 117.

(43) Ibid

(44) "Americans of Chinese Ancestry and Americans of Korean Ancestry"

(45) "Memorandum for Chief, Training Branch, MID: Attentions: Lt Colonel H.W. Buchanan 1945.12.4", RG165, Records of War Department General and Special Staffs, Office of the Director of Intelligence G-2, Subordinate Offices Training Group, Correspondence and Reports Relating to the Operation of Language Schools and Other Training Facilities, 1943-49, entry208, Box309.

(46) Anthony C. Brown, *Secret War Report*, p.132. J. マクノートン『二世リンギスト』、86頁より再引用。マクノートンは、米軍専属の歴史家として同書を執筆した。

の日本降伏およびその直後のOSS解体により、この計画は霧消した。

6. 中国を拠点にした OSS の朝鮮浸透作戦：朝鮮語と中国語の浮上

OSS資料群には、「対日戦争のために働くことを希望する朝鮮人あるいは朝鮮系米国人のための志願書」（以下、「志願書」と略記する）がまとまって保存されている⁽⁴⁷⁾。ごく簡略な様式で、名前、住所、両親の情報のほか、希望する職種、希望する勤務地を記す欄が設けられているのみである。申請書には日付の記載がないが、1944年から1945年前半までの間に作成されたものとみて間違いないだろう。希望勤務地の欄が米国か中国・重慶かの二者択一式であることから、明らかに中国を拠点としたOSSの作戦に関わるものだからである。連合国の対独戦での勝利、太平洋での米軍北進という情勢のなか、OSSもまた華北、「満州」、朝鮮、日本に向けて諜報戦を進めていた。高麗人（ソ連系朝鮮人）を利用した、ソ連による朝鮮半島への影響力増大に対する危機感も高まりつつあった⁽⁴⁸⁾。そのような状況下で、OSSは重慶臨時政府や在米朝鮮人たちとの連携の必要性を意識するようになっていった。OSS中国戦区の米軍司令官ウェデマイヤー Albert Wedemeyerも、「大日本帝国」のどこにでも行ける唯一の“非日本人”である朝鮮人の有用性を認識していた⁽⁴⁹⁾。このとき中国でOSSが主導した朝鮮関連の複数の作戦には、約50人のコリアン・アメリカンたちが志願したといわれる⁽⁵⁰⁾。なかでもよく知られているのは、イーグル作戦とNAPKO作戦である。

OSSと光復軍の連合作戦であるイーグル作戦にあたっては、1945年5月から西安の杜曲で訓練が開始された。杜曲を本拠地とする光復軍第二支隊本部に朝米合同指揮所が設置され、米側の人材不足と意思疎通の困難に悩まされながらも、両者の緊密な共同作戦体制が構築されていた。そこでは、主要軍事施設についての情報収集、得た情報を中国へ無線で打電するための通信訓練、日本に対する心理戦の練度向上、連合軍による空爆や上陸作戦のための基礎作業が行われた。だが、米軍側には朝鮮語を話す者がおらず、また、英語を解する光復軍側の朝鮮人も多くなかった。光復軍第二支隊長の李範奭と米側のC.サージェント大尉は、中国語でコミュニケーションを取り、他の兵士たちの間ではしばしば日本語が共通語となった⁽⁵¹⁾。なお、後に大韓民国の初代国務総理となる李範奭は、朝鮮語、日本語、中国語、ロシア語の四言語話者だった。

一方、OSSビルマ101支隊を率いたアイフラー大佐Col. Carl Frederic Eiflerが発案し、OSSワシントンD.C.本部が担当したNAPKO作戦では、在米朝鮮人たちが中心的役割を担った。互いにその存在を知らない孤立した10のチームを作って、GIMIKと名付けられた潜水艇や落下傘で朝鮮半島に浸透して北朝鮮のクリスチャン・コミュニティなどに拠点を作り、諜報活動や破壊工作を行うというものである。1944年1月にアイフラーは人員を探し始め、同年7月末にハワイにリクルートに赴いたのをはじめ、カリフォルニア、ニューヨーク、シカゴで候補者を探した⁽⁵²⁾。

OSSに提出された「志願書」の経歴をみる

(47) ただし、申請者がみな自ら進んで志願をしたのかについては疑問も残る。例えば、二世の D.E Ahn の申請書には、希望職種等については一切触れず、なぜ参加できないかという理由のみが書き連ねてある。志願書提出に、外部からの強制力が働いていたことをうかがわせる。

(48) “Memorandum on Korean Affairs”, 1945.4.21, RG226, entry UD133, Washington Registry Office Chronological File, Washington Field Photo Branch Records, Chronological 03-27-1945 THRU 04-07-1945, Container 58, Folder 428, COI/OSS Central Files 194101946, Container 269, Folder18.

(49) 金光載「韓国光復軍の韓米共同作戦と意義（한국광복군의 한미 공동작전과 의의）」『軍史』第52号、2004年8月、7頁

(50) 鄭秉峻「解題」『OSSのNAPKO作戦』、6頁

(51) Monthly Report for May: Eagle Project, , RG226, entry A1 154, May30, 1945. ロバート S. キム、127頁より再引用

(52) ロバート S. キム、103頁

と、米国政府や軍の機関での通訳、翻訳者や MISLS その他、米軍部隊での経験のある人々が多い⁽⁵³⁾。彼らはカリフォルニア南部のサンタ・カタリナ島で特殊訓練を受けた後、中国に送られた。その他に、運転や事務などの補助的作業で同作戦に貢献しようとした、二世たちもいた⁽⁵⁴⁾。

これらの任務にあたっては、日本語能力に加え、中国や朝鮮での新たな人材調達交渉のため、朝鮮語能力が要求された。朝鮮での居住経験や人脈、朝鮮文化の理解も不可欠とされた。そればかりでなく、中国語能力や居住経験も重視された。これは、1900年前後生まれ、つまり1945年当時に30、40代で、朝鮮語と中国語／漢文の素養のある人々が多く選抜された理由の一つとしても説明できよう。

例を挙げると、MISLS出身の朴基闢Ki Pyok (Buck) Pak (1915年生) は、朝鮮の平安道で17歳頃まで過ごし、その後「満州国」で教師として1年働き、ソウルで1年住んだ後にロサンゼルスへ渡った人物である。日本語、朝鮮語能力はAAA、中国語はBBC、英語はBBBである。また前述の張錫潤は、米軍が日本支配下の地を通して日本本土を目指す過程で、米兵の特務たちの日本語訓練も担当した。その最大の目的は、米兵たちが日本語と中国語を区別できるようにすることだった。これは、ベトナム人や中国人を装う日本兵から自らの身を守るために、必須のスキルだった⁽⁵⁵⁾。さらに張は、日本語ばかりでなく、中国語／漢文で書かれた秘密文書の翻訳作業も行っていた。

結局、OSSが中国で準備していたさまざまな計画は、NAPKO作戦の実行予定日だった8月

26日を目前にして日本が降伏したため、遂行されることはなかった。そしてOSSは1945年10月1日に解体された。日本の無条件降伏後、米軍はただちに日本と朝鮮半島の南半部を占領した。沖縄でNAPKO作戦の実行日を待ち、その計画が水泡に帰した後、一度米国に戻されていた李超 (1895年生)、李泰模 (1906年生)、崔チャンスD Stanley D. Choy (1907年生)、朴基闢、邊日曙 (1904年生) は、南朝鮮米軍政庁での勤務を希望した。全員がその希望が通らない場合は除隊を望んだように⁽⁵⁶⁾、朝鮮以外の地で米政府・米軍のために働くという選択はなかった。当初は、米当局に日本語能力を買われた朝鮮人たちは、今度は朝鮮語—英語通訳、翻訳者として、それまでよりもずっと高待遇で、南朝鮮で勤務することになった。朝鮮の植民地経営を行った日本の機構を、職員ごとほぼ受け継いだ米軍政庁において、彼／彼女らはその日本語能力も引き続き活用することになった。

その後、冷戦対立が深まってくると、米軍政庁勤務の在米朝鮮人たちもイデオロギー対立の渦に飲み込まれていった。玄アリスやその弟の玄ピーター Peter Hyun⁽⁵⁷⁾、鮮于学源らが、朝鮮内の左派人士との接触や左翼的思想傾向を理由に米軍政庁から追放されるという出来事が起こったのも、朝鮮戦争へと向かうこのような流れの中でのことだった⁽⁵⁸⁾。

7. 女性翻訳者たち

この時期、朝鮮女性たちもまた、通訳、翻訳者として重要な任務を負った。これまでに、前述の玄アリスのほか、チョン・スンドウク

(53) 太平洋戦争開戦以後、米軍に入隊した朝鮮人は少なくとも 250 人いたという。鄭秉峻「解題」『OSS の NAPKO 作戦』、12 頁参照

(54) OSS 文書中で二世とみられる人物には、H S. Kim, R F. Kang, S, Lee, K Y, Chun, Y H, Choo, A N. Wang がいる。

(55) RG226, entry A1 224 Personnel Files of the Office of Strategic Services 1942-1962, Box 117, Chang Suk Yoon ファイル等参照

(56) Chang Suk Yoon ファイル参照

(57) 玄ピーターは MISLS 出身。南朝鮮へ来る前に、米ウイスコンシン州のキャンプ・マッコイ捕虜収容所で通訳として働いた。ここにはサイパン、グアムで捕虜となった日本人のほか、150 人の朝鮮人兵士が収容されていた。鄭秉峻「解題」によると、そこから、NAPKO 作戦のための人員が少なくとも 3 人、リクルートされた。選出の任に当たったのは、張錫潤であった。

(58) 鄭秉峻「玄アリスとその時代」、153 頁

Soon-Duk Junという、サンフランシスコ戦争情報局で短波ラジオの日本語放送に関わった女性の存在が分かっている⁽⁵⁹⁾。

今回のOSS資料の調査では、さらに4人の朝鮮人女性の通訳、翻訳者の存在が明らかになった⁽⁶⁰⁾。それぞれの経歴を細かく見ていきたい。

7-1. Chung, L W

Chung, L W⁽⁶¹⁾ は1913年に慶尚南道^{チンジュ}の晋州で生まれた女性である。1930年から32年まで東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）に通った。そこで高校教師の資格を得た後、渡米した。1941年から二年間シカゴのエヴァンゲリスティック・インスティテュートで学びながら、1942年から8か月間アメリカ音楽学校America Conservatory of Musicに通った。言語能力は、朝鮮語および日本語がAAA、英語はBBB、中国語は読みのみCであとは不可と自己評価されている。1943年2月から11月まで、ニューヨークの検閲局で主任事務官（米政府規定の職階はCAF-6、年俸2,300ドル）として働く。結婚後にシカゴへの異動を希望し、同年12月から1944年8月までシカゴの郵便検閲局で、年俸が以前より500ドル低い翻訳者（CAF-4、年俸1,800ドル）として従事する。その後9月からワシントンD.C.のOSSで事務官（「インデックス」）（CAF-7、年俸2,600ドル）、1945年2月からはアナリスト（P-2、年俸2,600ドル）として、同アジア部門の部門間委員会の分析・要約部門で働いた。年俸2,600ドル（8時間労働、残業代別）というのは、当時の米国ではかなり高給な方である⁽⁶²⁾。ChungはOSS内部の査定でも、仕事の正確さや

効率性、協調性等が評価され、5段階のうち上から2番目という高評価を得ていた⁽⁶³⁾。1945年4月に退職したが、その理由は不明である。

結婚についての詳細も資料からは分からない。留学生として渡米した女性が、太平洋戦争勃発によって米国を出国できなくなり、朝鮮人移民二世の男性と結婚するケースがあったという。そのような事例の一つなのかもしれない。

7-2. A. C Harr

A. C Harrは、1917年ピョンヤン生まれ。ピョンヤンの崇義女子学校を1935年に、日本の神戸女学院を1938年に卒業した。なお、崇義女子学校は日本当局が強制した神社参拝を拒否したため、1935年に廃校処分を受けた（1950年にソウルで再建）。その後渡米したHarrは、ロックフォードカレッジで1940年に学士号を取得する。専攻は社会学で、英語のほか、政治学や経済学も学んだ。なお、夫は「満州」生まれの朝鮮人である。朝鮮語、日本語能力は、三項目ともAである。1942年6月から9月まで、シカゴの郵便検閲局で日本語で書かれた手紙の翻訳官として働いた。年俸は1800ドルで、前記のChung, L Wの前任者だったとみられる。その後「より良いポジションがあった」ため、ニューヨークの郵便検閲局でChung, L Wと入れ替わるようにして、1942年9月から1944年4月まで同様の仕事をした。このとき年俸は2300ドルに上がっている。1944年4月から11月までは、ニューヨーク米陸軍補給軍の言語部隊で、郭カルCarl Kwak⁽⁶⁴⁾の下で朝英、英朝辞書のタイピングや編集などを行った。

(59) アン前掲書参照。元収容所通訳の金ダニエル・テムク Tai-mook Kim の元妻である。

(60) もう一人「志願書」を提出したI S Kang という女性がいる。朝鮮人の夫を持つシカゴ在住のコケージアン女性で、朝鮮人たちの抗日戦争を手伝いたくて志願したと記されている。

(61) RG226, entry A1 224 Personnel Files of the Office of Strategic Services 1942-1962, Box 124.

(62) 例えば、司法省管轄のミゾラ収容所での通訳、検閲の年俸は2000ドルだった。当時のアメリカの牧師の平均年俸は1200ドルほどだったという。アン、74頁参照

(63) “Report of Efficiency Rating” (8/7/1944-3/31/1945), RG226, entry A1 224, Personnel Files of the Office of Strategic Services 1942-1962, Box 124.

(64) 郭カル・チョンスン Carl Chungsoon Kwak (1912年生) は、米国で英文学と音楽を勉強した男性で、その語学能力を生かして日本語教科書の執筆、朝英／英朝辞典編集などに携わった。NAPKO 作戦にも参加した。RG226, entry UD92, OSS E 92 container 210, Folder 22 等参照

妊娠を機に退職したが、すぐにOSSにリクルートされ、1945年5月に米軍アジア部門のアナリスト（P2、年俸2600ドル）として採用された。だが、その直後に1946年度予算の減少により採用できないとの通知がOSSから送られており、OSSの消滅により実際に勤務することはなかった。彼女は、4月に退職したChung, L Wの後任として考えられていた可能性もある。その仕事内容は、諜報活動に役立つ機密をいろいろな文書から抽出し、要約するというものだった。なお、1942年作成の調書ではHarrの国籍は「朝鮮」だったが、1944年あるいは45年に米市民権を取得した。

7-3. D. Park

D. Parkの名は、OSSに提出された「志願書」に見られるのみで、詳細は不明である。そこには、スパイ活動および運転技術でOSSに貢献できると記されている⁽⁶⁵⁾。父（当時60歳）と母（63歳）が朝鮮にいることから、留学生として渡米した人物とみられる。

7-4. Kim, A

Kim, Aは、1919年にハワイで生まれた二世である⁽⁶⁶⁾。父親がハワイの米軍キャンプで20年間働いており、地元の商業高校を卒業した彼女は、そこに出入りしながらPX（購買部）で数年働いた。8年間ハワイの朝鮮人学校で学び、朝鮮語は読み書き会話すべてに優れていた。日本語の会話も少しできた。

彼女はその後、米陸軍女性部隊WACに入隊し、ジョージア州のフォート・オグロソープで勤務した。1945年2月にOSS司令部に通訳、翻訳要員としてリクルートされた。その後、中国に渡ったKim, Aは、現地のエージェントたちからの報告をもとにした諜報報告書作成や編集の仕事を任された。

彼女についての内部報告書では、やる気があり、学ぶ意欲もあり、決断力に優れ、熱心で、履歴書で書かれた内容以上に能力が高いと手放しで称賛されている。さらには、細身でこざっぱりしていて外見もマナーも素晴らしい、といった身体的特徴までもが評価されている。これは、男性たちについての報告書には見られない記述のされ方である。中国で計画された作戦が未遂に終わって米国に戻った後、1946年2月にハワイでタイピストとして働きたいという希望を出して、除隊した。

以上、1913年から1919年生まれまでの女性通訳・翻訳者たちの経歴を見てきた。1945年の時点で20歳代後半から30歳代だった女性たちである。留学生として渡米したChung, L WとA. C Harrは、朝鮮、日本、米国でそれぞれ学校教育を受けており、結婚や妊娠を経ても、その実力を米国の雇用者たちに高く評価されて仕事を継続した。

朝鮮では1920年以降、キリスト教系の女学校出身者たちによる米国留学が増加した。朝鮮のキリスト教系の学校では、英語から日本語に重訳された本が使用されていた。朝鮮や日本のミッションスクールで英語に親しんでいた女性の米国留学生たちは、男性たちに比べると総じて英語能力が高かったといわれる。朝鮮女性の米国留学生数のピークは1926年で、1800年代後半から始まり1941年に流入が止む前までに、100名あまりの女性が米国留学を果たした⁽⁶⁷⁾。A. C Harrは1938年から1939年に渡米したとみられるが、朝鮮女性の米国留学生の数は1938年には8人、1939年には5人であることから⁽⁶⁸⁾、彼女がごく少数の女性留学生のうちの一人だったことがわかる。

一方、ハワイで生まれ育った二世のKim, Aは、米国で身に着けた朝鮮語能力を生かし、ア

(65) RG226, entry UD92: OSS E 92 Box217, Folder48.

(66) RG226, entry A1 224, Personnel Files of the Office of Strategic Services 1942-1962, Box 124.

(67) 「渡米学生諸君へ（韓雅振）」『東亜日報』1926年10月28日、11月1日、鄭秉峻前掲論文より再引用

(68) 鄭秉峻「日帝下における韓国女性の米国留学」39頁、「表7: 日帝下朝鮮女性の渡米留学生の年度別推移」参照。ただし鄭は、この表がまだ完全なものではないと断っている。

アジア太平洋戦争末期には軍人として中国にまで赴いた。ハワイ移民たちは、李承晩のハワイ訪問などに刺激され、1910年代から子どもたちの朝鮮語教育に力を注いでいた⁽⁶⁹⁾。初期の朝鮮女性たちは、教会以外の用事で外に出かけることはほとんどできなかったというが⁽⁷⁰⁾、二世たちに朝鮮語を教える学校はその教会に付設された。朝鮮系二世たちのほとんどが、牧師から朝鮮語を学んでおり、Kim, Aもおそらくその一人だったのだろう。

在米朝鮮人の世代交代が起こり、朝鮮女性たちの生活や学習環境が変化したこと、米国式の実力主義が朝鮮人の生活にも影響を及ぼすようになっていったことも、Kim, Aの事例からはうかがえる。

おわりに

本稿では、1940年代前半の太平洋戦争期の米国在住朝鮮人たちの言語様相と、それが米国政府・軍によってどのように利用されていったかを、OSS文書から探った。OSSに雇用された、あるいはOSSが調査した具体的な朝鮮人たちの渡米の背景や学歴、言語能力に着目し、朝鮮、日本、米国という三地域に加え、中国、東南アジア、インドなどにも移動し、通訳・翻訳者として活動した朝鮮人たちの全体像の把握を試みた。

今回のOSSの人事ファイル調査では、当時の朝鮮人たちの言語能力が、その生い立ちや学歴によってさまざまに異なることが明らかになった。李承晩と繋がりがあった1800年代後半生まれ、つまり植民地化以前に青年期を過ごした知識層の朝鮮人たちは、日本語ができない場合が多い。だがその代わり、漢文（中国語）の知識を備え、中国での生活経験がある場合もある。また米国生活が長く、英語能力が比較的高い傾

向もみられる。一方、若い朝鮮系二世たちの場合は、日本語能力はもちろん朝鮮語能力も総じて低かった。だが、市民権と軍籍を持つ英語ネイティブの二世たちは、米政府としてはより使いやすい人材だったようだ。これら二世たちの言語面のもう一つの特徴は、地元の高校でドイツ語に接する機会があった点である。

一方、1930年代に渡米した留学生たちは、朝鮮語、日本語、英語の優れた三言語話者だった。会話はともかく、中国語／漢文の読み書き能力も高かった。日本留学経験者は日本語能力がひととき高く、OSSでも重宝したとみられる。その他、チベット語やモンゴル語の知識もあった鄭キウォンKei Won Chung、戦地でヒンディー語などの現地語を習得した張錫潤のような、特に優れた言語能力を有する場合もあった。Carl ChungsoonとDavidの郭Kwak兄弟⁽⁷¹⁾、Chung, L W、Y S. Hyun（1901年生）⁽⁷²⁾といった、音楽専攻の留学生だった通訳たちも目に付く⁽⁷³⁾。

本稿では、1940年代前半に日系人収容所、米陸軍情報部MISとその語学学校であるMISLS、米海軍や米国内の大学における、朝鮮人についても明らかにした。また、1942年から1944年ごろにかけて、手紙の検閲、地図、日本語教科書や書籍、各種機密文書の翻訳に関わる朝鮮人が一定数おり、それらエリートの多くが、1945年前半のOSSの中国を拠点とした対日情報作戦に加わっていったことを確認した。

1940年代の米国の対日、朝鮮、中国、ソ連戦略のめまぐるしい変化に伴い、朝鮮人の言語能力はさまざまに利用された。真珠湾攻撃当初、米当局が日本人や日系米人全体に疑いの目を向けていた時期には、朝鮮人たちは貴重な即戦力となった。太平洋地域で日本軍との戦闘が始まると、朝鮮人通訳・翻訳者たちは日本兵捕虜の訊問にも携わった。その際には、日本軍の軍属や労働者として捕らえられた、日本語能力の不

(69) 李里花、97 頁

(70) 同上、80 頁

(71) RG226, entry UD92, OSS E 92, Box 403, Folder 22. 兄弟の経歴が酷似しているため、OSS 側も混乱したようで、二人の文書が同一のファイルに収められている。弟の David はのちにチェロ奏者となった。

(72) RG226, entry UD92, OSS E 92, Box 202, 14584.

(73) その他、バリトン歌手の Frank Yong-Jun Lee もその一人。アン、40 頁参照

十分な朝鮮人たちと、朝鮮語でコミュニケーションを取ることもあった。

MISLSが朝鮮人に日本語を学ばせる代わりに、新設した朝鮮語コースで朝鮮語を学ばせ始めたのは1944年8月のことである。米政府と軍の、中国大陆や朝鮮半島の人々との接触や共同作戦計画がその背景にある。このようにして、朝鮮人の朝鮮語能力、そして中国語／漢文の知識も重視されるようになっていった。

太平洋戦争開戦は、米国在住の朝鮮人たちに、日本の支配からの解放への大きな期待を抱かせた。当初、米国政府は朝鮮人たちの日本語能力をもっぱら利用しようとし、朝鮮人たちもその要請に応えた。元通訳の人々にインタビューしたアンは、みな一様に、米政府が米国内の朝鮮人と日本人間の反目や対立を利用していたと考えていると感じた、と記している⁽⁷⁴⁾。

米当局は1944年から1945年にかけて、米軍入隊者や朝鮮人通訳、翻訳者たちに、米国市民権を付与している。米海軍大尉の地位を与えられ、OSSの朝鮮グループのリーダーとなった咸龍俊R.C. Hahmもその一人である。またMISLSの記録によると、留学生で日系収容所通訳、海軍語学学校やUCLA、ワシントン大学などの日本語講師を務めた李チャンヘChang Hei Leeの帰化が、1945年10月に許可されている⁽⁷⁵⁾。米当局の朝鮮人に対するこのような特別措置は、対日作戦やソ連の影響力拡大の牽制に役立つという計算以上のものでは、むしろなかった⁽⁷⁶⁾。

1945年9月8日に米軍が朝鮮の38度線以南を占領すると、朝鮮語－英語通訳の需要は急速に高まっていった。1943年に日本語能力を買われて、OSSアジア部隊の「管理者補佐およびチーフ補佐」(年俸3750ドル)となった鄭キウォンは、

1945年11月に米陸軍省へ移り、朝鮮語通訳となった。このとき、年俸が4750ドルに跳ね上がっている⁽⁷⁷⁾。1945年以後、それまで日本語講師として勤務した李チャンヘはシアトルのワシントン大学で、崔ボンユンはUC バークレーで、それぞれ朝鮮語と朝鮮史を教えはじめた。冒頭の金チェスター・フンは、1952年から5年間、韓国へ派遣される予定の米軍将校たちに、ワシントン D.C.で朝鮮語を教えることになる⁽⁷⁸⁾。彼らは米国の東アジア政策の変化に伴い、日本語講師から朝鮮語講師へと変貌を遂げたのである。

当時の朝鮮人通訳・翻訳者は、アジア太平洋戦争期／植民地期から終戦後／植民地解放後という時間軸をまたぎ、朝鮮、日本、米国、中国の境界を超えた移動者の側面を持っていた。第二次世界大戦後から現在に至るまでの、米国の北東アジアにおけるプレゼンスを考えるうえで、これらの人々の存在のさらなる検討は欠かせないだろう。

1940年代後半に、通訳・翻訳者として米国内外で活躍した、高学歴かつマルチリンガルの朝鮮人たちは、米国の後ろ盾によって樹立された大韓民国と米国の橋渡しの役割も果たすようになる。クリスチャンで、反日、親米、保守的だった彼／彼女たちの一部は、韓国の政界、経済界でも一定の影響力を持った。このような米国経験を経た朝鮮人知識層が帯びた性質は、韓国という新生国家やコリアン・アメリカン社会の特徴をなすものとなっていったのだった。

* 本研究は科研費 17K02666 の助成を受けたものである。

(74) アン、74 頁

(75) MISLS Training History Annex4 by Intelligence section IV. (2) A. Alien Students for MISLS. この時、日本、ドイツ、イギリス系エジプト人、中国人など合わせて 25 人の若者に帰化が許可されている。

(76) たとえば、Whang, S, Y (1883 生) という 60 歳の牧師は、1943 年にハワイでの教会の仕事を辞め、ワシントン D.C. に居を移して OSS に雇用申請書を提出した。それを聞いた Whang の知り合いの米軍人が、黄は朝鮮独立運動にコミットしすぎており、米軍にとっては役立たないだろうから雇用しないように、と電話で OSS に伝えている。RG226, entry UD92, OSS E 92 Box403, Folder22.

(77) RG226, entry A1 224, Personnel Files of the Office of Strategic Services 1942-1962, Box 124, Chung, Kei Won.

(78) アン、128 頁